

先進繡像玉石雜誌

義

續

二

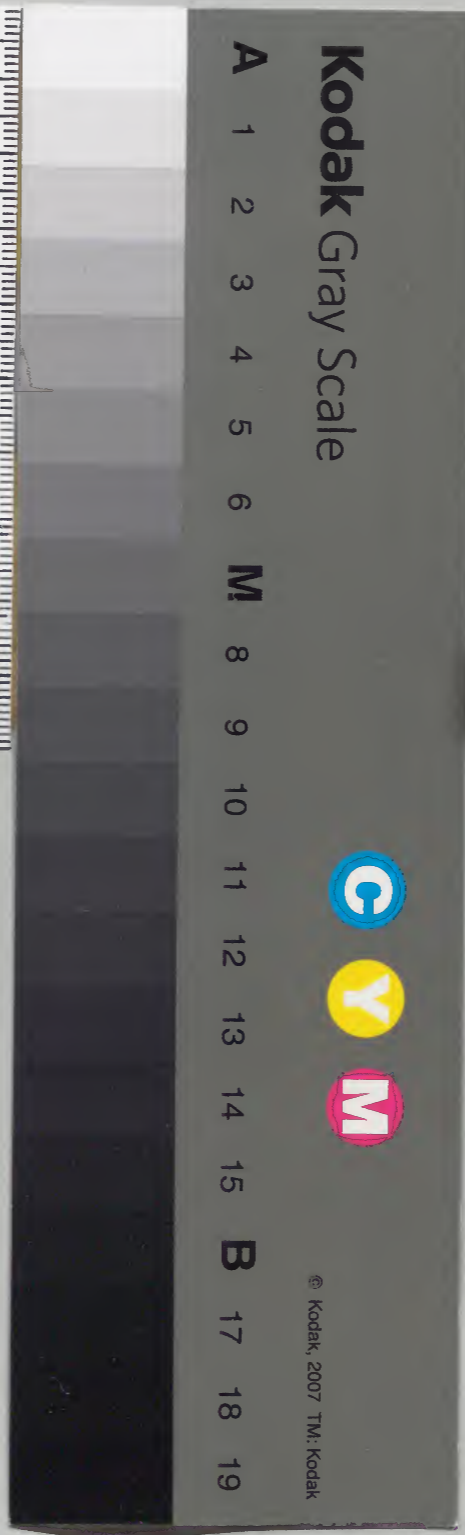
和書門			
類	號	函	架
一	六〇	二	二
二	三	九	二
三	二	一	〇
四	一	〇	〇

內閣文庫			
類	號	冊	函
和書	六〇	二	二
	二	一	〇
	一	〇	〇

史傳載紀

史傳載紀十二

內閣文庫		
番號	和	16024
冊數	20 (12)	
函號	158	211



同日

天文七年信虎朝長四十八歳晴信朝長
長次郎馬

助信繁十七歳了成五小正月元日
始乃盃を祝せけり

了嫡子晴信朝長次郎乃左馬助
へ所せり也

膳乃扨後等由面あふ見けり
了晴信朝長を更了氣乃付

了子體あふ座を其後三男孫六信連
了指玉以志し晴信

朝長少由恨多色あふ却了怒也慎了
退出せり也けり

鎌倉年中行事享徳年中乃書
あ里天文七小正月朔日

早且御祝乃始了蛇搗栗昆布
あふ御酒あ里其時番入

紙候乃奉云中御酒下せ也
御扇一本宛拜領御辺邊子

宿所あ里人々非番あふ由御祝
子被達十方あ里其後

御臺椽乃北の方同御袋椽上
臘椽中臘椽下臘皆々御

河へ御参云々朝乃御祝云々御系里着ふ御酒之獻其
時奉云乃老若出仕宿老一人宛御前へあさき御盃并
み御劔彼下云々とあり是を鎌倉成氏朝臣乃時乃
式おり長祿二年以来申次記了正月朔日當番の申次
御對面所乃際乃砌へ系々面々と申入る罷退御之盃
系系同數の御盃系系則御酌被系以る御之盃之あつ
彼同食以る其後數乃御盃人數了依て之折ふる由
折ふる由並ひる重里以御盃乃上一通を出入りせられ
る置也以時御酌乃人御鉦子を先御前乃帖了置る其
御盃乃御下を少宛次々乃御土器へ入渡中ひへハ聊
の潤ひ以尤様了ひる本膳の之御盃を由其上居渡

玉積一ノ冊一

中ひ均ハ御前乃四方おる御盃一由多し尤換了ひる
其數乃御盃を系中たふすに方を御前乃とをり御右
乃方お差除る置御帖了系中は系御鉦子を取る數
の御盃乃四方並中たふ折り片膝を立畏る御盃を一
宛取る御鉦子乃上居り居り被待中ひ之職
以下御盃頂戴乃宛一人宛被系給入也と云々京都將
軍家乃式おり其他上野新田金由良家乃式おり持派
長門守覺書不見え安房里見家乃禮々此條以代記ふ
記せ里

同日廿日板垣駿河守信形を使とる晴信朝長了近日
駿河へ御越あり今川家乃傳えたふ諸禮式舊古有

吾命を中させけり。晴信朝長、誓ひ悪ひ色終人氣色
く仰乃趣謹く承るる。御誂次第發途仕ふ趣きふ
中々勢玉への信形渡をとりくと流し、君も何と
也以への尤様了徳やうか子御返辭を中させら
おぢ大教るる次郎教を總領ふ立させら
先君を目み見えぬ邊へ追懸け給入御下意と
守飯富兵部少輔等を始老長と申一因了推察
新羅二郎より以降累代乃御館を芻蕘の墟と
乃棲と荒さんと遠ふあ、然ハ君を勧めま
推慈系らと當家中興乃謀を運ら、以と
を以了。何丈程云甲斐あ、を以宜を以、思立

百續一ノ卅二

玉へと道理を盡しく申せ共晴信朝長更同心乃色あ
坐ハ信秋もせん、乃退し、重孫く飯富兵部少輔と共
不、信虎朝長乃前子出、中け教を晴信朝長駿河へ趣を
あ入趣を御催、一定と承る、以一人あ、打立を
母方一小回原を、諷方小笠原あんとへ落しを
中々後御大事あ、是ハ大教、以駿河へ御越有
然晴信朝長を迎、勢玉、何乃怖畏、以へ、詞巧
勸中去、ハ信虎朝長實と同意せり、晴信朝長を
甘利備前守了、預け、以駿河より、一尤右次第送、里
を、魚を、中、宣ら、御館乃留守、入、尤馬助信繁、万事ハ
ハ伊豆守信行、及、以諸老長等乃計畧、た、へ、申、入、三月

九日甲府を立去。駿河へ越え、五ノ斯。板垣信形、飯富虎昌、小田備中守、穴山伊豆守等、乃諸老長、甘利備前守、許小打寄、大殿次第、不氣、隨不威、を以、諫ふ者、を討果し、遂に晴信朝長を廢す。家嫡を亂ん、を謀ら、勢を以、天道猶武田の家、其外あり、勢を以、け、駿河へ渡ら、勢を以、決ふ、晴信朝長、乃利運、當ら、勢を以、去、瑞ふ、急、御館へ、御後、後あり、疆、乃關、乃戸を鎖、勢を以、隣國へ、乃御手遣、あり、勢を以、以、へ、かくと、勸、せ、は、晴信朝長、袖、合、を、諸老長等、乃計畧、最、其理、あり、と云、共、父、乃讓、を受、去、あり、家督、たらん、と我、本意、あり、折、殿、乃仕置、暴虐、坐、を以、國、人、乃惡、を受、去、人、と、から、は、我、その、長男、あり

共、不、嫉、を受、以、廢、し、我、何、之、此、民、を撫、育、を、る、と、を、得、ん、や、卿、等、深、く、思、慮、去、我、不、孝、乃、名、を取、去、む、不、と、あり、也、と、宣、ひ、去、の、板、垣、初、公、以、下、然、ら、ん、氏、神、八、幡、大、菩、薩、御、旗、指、無、乃、御、前、ふ、闖、を取、去、神、慮、了、任、を、御、計、あり、を、使、す、即、御、旗、指、無、乃、別、當、出、下、伊、勢、守、承、を、闖、を、窺、入、了、老、長、等、乃、計、策、不、從、去、魚、を、神、慮、揭、為、かり、是、け、也、ハ、斯、上、ハ、と、同、十、七、日、晴、信、朝、長、御、館、了、後、後、を、以、入、魚、を、旨、を、定、め、ら、終、け、去、了、左、馬、助、信、繁、元、よ、里、見、了、厚、く、親、也、と、ふ、よ、里、信、虎、朝、長、母、後、去、駿、河、へ、越、え、け、去、市、川、笠、井、青、原、古、屋、大、原、小、鹽、等、の、妻、子、を、人、質、曲、輪、了、取、籠、去、後、了、晴、信、朝、長、城、近、く、兄、弟、一、所、了、本、丸、了、入、玉、入

春秋傳しゅんしゅうでん宋樂祁魯そうのがき昭公しやうこうを譏まをとあり。政を喪なげひ民を無なせ里而をり能よ其志そのしを逞とる者もの未いまあは有あり。國君こくくんは是これを以もつて其民そのたみを鎮撫ちんぶを詩うたふ云い人乃ひと云い不お亡な心乃こころ憂うれ也なり。
昭公しやうこう廿に年ねん傳でん信虎朝長のぶとらあさむね乃なり暴虐ぼうにやく魯昭公ろしやうこうの類たぐひ了あり。非あらを殆たんと禁討きんたう乃なり行いと同おない。幸さいふ祖宗そそう乃なり明威めいゑいと世せい長ちやう乃なり果斷くわだん不な依よて其業そのげを墜おしおす。孟子まうし乃なり云い貴戚きせき乃なり卿せん也なり。君過きんあまあはは諫いさむ。諫いさめて聽きさせば位ゐを易やすふとや。板桓いたか而を甘利かんり等ら同おな姓せいふ。最重さいじゆう代だい乃なり老將らうしやうあり。其祖宗そのそそう乃なりためふ。主しゆ乃なり位ゐを改あらたむ。固こ之を乃なり云いふ。主しゆ敢あて終しゆうむ。へき理りを。晴信朝長はるのぶあさむね去いの歳さいよりなり十八歳じゅうはちさい諸老長しよらうちやう乃なり推尊おしそんと國人こくにん先まを厭いとふ。故ゆゑとふ。あはは争いさふ事こと乃なり爰こゝ及およぶ。入いへ。んや。然しからば信虎朝のぶとらあ長ちやう臣おみを追おふ。乃なり晴信朝長はるのぶあさむね了あり。非あらを。諸老長しよらうちやうと國人こくにんあり。と云いふ。

玉續一ノ廿四

臣おみを追おふ。乃なり晴信朝長はるのぶあさむね了あり。非あらを。諸老長しよらうちやうと國人こくにんあり。と云いふ。
駿河しゆまがは乃なり今川義元朝長いまがはのよしたもあさむねを内々うちうち晴幸はるさちに申まをせ。一ひと乃なり符ふを合あせ。夫こゝ乃なり如ごとく信虎朝長のぶとらあさむね果はて。諸老長しよらうちやう乃なり夫こゝを國くにを追お出だせ。駿府しゆんぷより来きり。入いへ。然しからば老幼らうじゆう乃なり信虎朝長のぶとらあさむねを駿河しゆまがはに停とどめ。五年ごねん義元よしたも晴信朝長はるのぶあさむね乃なり家督けとくを定さだめ。是こゝを父ちちを質しちと。子こを制せいする。道理だうりを。之これに甲斐かうはいの國くにを永とこく今川家いまがはのけ乃なり旗はた下くだた。夫こゝを一ひとと思おも惟たゞ有あり。乃なり信虎朝長のぶとらあさむねの館たねを新造しんぞうせ。ら。饗應かうおうす。夫こゝを大方おほき。斯こゝに於おり。節義せつぎ元朝長げんあさむね乃なり北きた方はた御産ごさん乃なり催もす。有あり。男子なんし誕生たうじん坐まぬ。信虎朝長のぶとらあさむね乃なり外孫がいそんふ。後のちに今川上いまがはのうへ總すべ分ぶん民たみ真まと申まをせ。一ひと是こゝに。夫こゝに。駿遠しゆんえん乃なり諸士しよし今川幕下いまがはのまくくだ乃なり歴れき々々兼かねて。晴幸はるさち乃なり云いふ。一ひとと云いふ。



玉續一ノ冊五

此信虎朝長角之當家母座ハ甲斐信濃日向入る予前ハ把
 不及軍七世ハ隣國を討奪る大事の御客よと
 奔走業敬シ程不信虎朝長ハ何し物六ヶ鋪甲府より人
 易方不剛々々月日を過し入内り義元朝長又副介
 乃為りとき色美女を進しハ天文八年男子誕生あり
 武田上野介信友と云し母人あり甲斐國より晴信
 朝長老長等と共に信虎朝長乃新政を改革り萬事は
 八幡寺陸奥守信武朝長晴信朝長十乃舊觀を守り迎り
 永昌院刑部大輔信昌朝長の曾祖父長興院刑部大輔信
 繩朝長信昌朝長乃善政を追り一國平均乃安堵を仰り
 口民接育乃洪恩を施せけり及威風凜々と遠くを靡

かし武備嚴重了志急漫色あり國人内り親し隣國
 外り怖を去り暫時の間國中静謐了屬を是に於り力
 を戮せ家督を定んと接り大里ける義元朝長も持あり
 結向晴信朝長を年若しと云共心疾く物も色ける其の後
 並崎合戦了六千餘人を以り小笠原長時諏訪頼茂九千六
 百餘騎あり寄來りしを責破り時乃際には乃戦し首
 を獲り二千七百四十八級小幡織部正虎盛原美濃守虎胤
 等死力を竭き功大ありとハ云共晴幸胸中小蓋蓋
 大里奇合の兵機を施せし故なり並崎合戦天文七
 年七月十九日也
 葛木合戦了飯富兵部少輔虎昌了八百餘騎板垣駿河守
 信成了七百餘騎を授け村上義清乃侍了金山隠岐守千

七百餘騎。諏訪頼茂乃侍桐原之水。正午。六百餘騎。不。臺
 原。着。御。子。多。く。去。た。り。を。追。退。け。燃。揚。野。葛。木。兩。處。乃。軍
 不。首。を。斬。て。二。百。七。十。口。級。晴。信。朝。長。甲。府。乃。館。を。出。て
 信。濃。乃。兩。將。を。挫。り。是。去。り。か。く。兵。を。制。し。て。貫。繩。乃。如
 く。碁。局。乃。如。く。疎。暢。洞。を。か。か。と。管。仲。乃。遺。法。乃。據。る。所。以
 か。不。慮。一。日。廿。二。日。乃。軍。あり。又。後。乃。城。を。責。め。薬。師。寺
 右。近。多。流。之。右。兵。衛。小。治。川。舍。人。助。村。上。義。清。乃。為。ふ。を。走
 せ。天。文。九。年。正。小。荒。間。乃。戦。ふ。村。上。方。乃。清。聖。井。上。り。之。千
 月。十。六。日。五。百。餘。騎。を。破。り。天。文。九。年。二。月。十八。日。崇。村。田。天。文。十。一。年
 平。澤。同。年。田。之。宮。川。同。年。大。門。峠。同。年。十。月。處。々。乃。軍。小。寺
 勝。出。ひ。今。乃。信。虎。朝。長。乃。叛。き。た。家。諏。訪。佐。久。小。縣。諸。郡。乃

五續一ノ卅七

軍。敵。所。縁。を。求。め。追。々。乃。人。質。を。納。り。歸。參。せ。不。使。駿。府。へ
 落。か。く。聞。え。り。か。信。虎。朝。長。乃。莫。々。乃。傍。乃。在。り。見。ぬ。み。を
 後。安。乃。色。と。更。乃。歸。國。乃。念。を。絶。て。剃。髮。深。衣。乃。體。乃。成。也
 乃。斯。有。一。後。乃。晴。幸。駿。何。乃。在。り。何。乃。せん。急。乃。甲。府。乃
 冬。て。軍。議。乃。如。く。不。慮。一。但。故。か。く。呼。寄。た。らん。小。武。功。譜。代
 乃。諸。士。思。付。乃。々。々。乃。天。文。十。三。年。正。月。二。日。板。垣。信。政
 飯。富。虎。昌。甘。利。備。前。守。か。と。を。呼。集。め。佐。久。小。縣。諏。訪。等。の
 塙。月。乃。城。を。築。き。軍。兵。を。籠。置。連。々。乃。村。上。小。笠。原。諏。訪。本
 曾。等。を。并。從。へ。碓。氷。嶺。を。越。り。關。東。を。平。均。を。教。り。或。乃。美
 濃。飛。騾。を。討。靡。一。着。狹。迫。乃。進。り。都。小。旗。を。立。一。夜。武。家
 乃。棟。梁。と。仰。せ。ん。出。と。を。思。お。せ。城。取。繩。張。乃。名。人。あ。ら。ば

呂連末也と宣へ板垣信成進出くそれ未だ之列半内
乃浪人より本勘助晴幸と中老今之駿河乃今川敏了仕
官を願く庵原安房守の家を寄居居以亦也是を権謀乃
十三家形勢乃十一家陰陽十六家技巧十三家元々兵書
五十二家を胸了浮へ張良韓信の序次兵法を明めたる
達人より以と中老の晴信朝長兼く同及人勘助急を呼寄
願し所領より以百貫を興入居りおつとそ宣ひける

天文八年九月十二日轉害會執事記ふ餅米長合升定十
八石代十六貫三百文飯米八十二石四十七貫八十八文
と見ゆ長合升より山城國相樂郡平尾村岩崎氏より菰を
引物方口付六分半深一寸九分弱積口十一寸餘今升の

六合之六撮を容る即是延喜式の穀升亦長合升乃
十八石也今乃十一石口升八合餘不當其價十
六貫三百文亦也は一貫文今乃米七十石二斗二升餘不
買へし然る時より百貫文今乃米七十石二斗二升餘不
當る年小依り豊耗有るに共米價乃大概を窺ひ
知る是を所領より以初田賦を定免亦也一時一町
乃獲稻五百束を割り廿二束を租比亦以百七十八束
租を積り是を封と云領と云百姓地乃主亦是故租
を領と云了租より代り布帛綿革を輸送を濟物と云乃
貢と云是を納を運上と云終り一轉去り田地を給是
致す亦く物を與人亦を所領と云樂記乃了領と云

下を論る。又知行と云ふ田地乃主と云ふを云
とある。但知行後貫と云ふ土地國師不依
同十からせ
明德五年甲戌新田庄段錢乃目録を見れば一町三貫
二百八十八文乃處あり五貫七百廿二文乃處あり三
貫文乃地あり永正十二年三河國明眼寺の文書あり
一町又百文ありと云ふ文乃地あり地不肥瘠の次
第上中下あり故あり駿河國沼津妙海寺に今川家
武田家共了五貫文乃地と定る。享長里小を元和二年
二石二斗又合乃森了改ら也。一貫を二斗に升一合を
升百貫を二斗に升。井關次郎左衛門了始と云ふ十六貫文給
に石一斗あり。失里一々元和二年了米二百四十六俵と改給里。一貫
の六

玉續一ノ卅九

儀八分餘。小當里十貫の六十八俵餘。武田家乃分國大
小當里百貫の六百八十俵餘。小當る。概收納牒了甲斐國六萬貫と云ふを元和二年小廿四万
石餘と定ら也。一ハ石を改る一貫と充くと同也。

板垣信形晴幸。清貧を知らしめ。衣服乘馬。鎗着黨。小
者。小望るま。是を調る。庵原。病前。へ贈る。けり。

世鏡抄乃定め。六百貫乃禄あり。中間之人馬一疋と云
但太刀持張替了持甲持了使人あり。晴乃時を敷皮持
を名具と。是を將軍家番衆乃儀と。かや。武田家乃定ら
知行十五貫より卅貫まを。一騎衆と云。地方十五貫
玉。一騎衆了。馬取一人。鐘持一人。主共了。三人と云。里
衣服。布直。疵。白。裁。折。烏。帽。子。但。武。田。折。乘。馬。を。黒。鞍。

葛藤小総鞍を不慮に弓鎗を不慮に荷せしを若黨が棄
替了騎了めしと云元弘元年唐崎濱合戦乃桑久後陣不
引ける海東若黨八騎云々佐々木判官由馬を射させ
る乘替を待たし名を惜命を輕くを教若黨共返合
へし合所々々討死せしけり有ふに知へし
庵原晴幸も百貫の墨付をせし後了發是を慮しと云け
るを存せ教旨乃以とく其後駿府を首途し二月上旬甲府
不着し板垣了斯と告し信成即十次々御館了冬其
體一服ふし是敗た里手麻處々了蒙々手指不足せ里然
ふ其名曰方不隱也かきは能く武畧了秀たふり故かふへし
さく其百貫の縁不足か里晴信り見参乃驗ふまひ二百

貫を與入處しとく其座不く朱印を出せ是輕廿八人
を預け横田京市川城多田等乃列ふかえらばなり
源平盛衰記信連戦乃桑久足輕共亂入り探り奉せし
下知と云へ檢非違使廳乃下臈か里之井寺會議乃桑
久之位入道頼平家を夜討せんふは是輕二三百人法
勝寺乃北拔よる之桑河原祇園乃邊とせか里と遣し
と云ゆ子息兼綱檢非違使判官た里一間是輕下臈を
使ふか久慮し太平記了楠り足輕乃野伏と云へ廳の下
臈非を輕捷乃步卒と聞於樵談治要ふ是輕と云者
敵乃楯籠りたらんかふ力かし尤も無所々を
打破里或は火を掛て財寶を亂るし單不晝強盜と云



信元
縮圖



玉續一ノ 四十一

魚一と云ハ平相國乃亮乃類とあは京乃河司乃下部
と知る永祿六年京都將軍家役人帳了同朋御末之男是
輕元秋本兵衛尉曾我左衛門尉之上式部丞中島但馬
守以下廿七人を載を其次る是輕元野村越中守長
井兵部少捕十口人を載た是但是也足輕乃將あふ
奇異雜談之應仁乃頃是輕一人あり朝飯以前不關子
乃紋乃惟子了前黄乃緩子乃十徳乃刀服差あく宿を
出中間乃肩衣に幅袴あく笠の笠を頭あかけ手鑑を
荷え跡了拵くと云是輕也將あふへし甲州乃足輕也
革具是を著く鐵ふく筋を了たは革鞆を著く白き軟
枝乃指物を差弓鐵炮乃足輕也知乃之貫以くあは長

至續一ノ聖

柄鑑荷小旗馬印持等乃足輕也知行二貫宛と云是今
乃田地小免也ハ之貫也十二石二貫也八石也
原加賀守昌後進之出く中けるハ古語ハ位定里く然後
出也を録也禮記又之功を以く録を詔人周禮と也承を
以ハ供あふ山本勘助未何乃功也立ハ其位也定里
中々あふ百貫乃録を加えらる一と君の爲忽ハ似く且
之他乃議を拵く端ハ也やハん是説と諫む也ハ晴信朝
臣也也はとよ勘助未之列牛産了住せし頃我々十に歳
乃時小山田備中守と共に遙々之列ハ立越彼者了兵法
を學ハ國々乃風俗弓箭乃意地要害乃繪圖を調へさせ
其後駿河了後らせく今川家乃消息を窺をを關東乃機

密を籌らせたり。功勞九年了及ふ二百貫更不惜。是
を今又晴幸を困ふ處有ら。故了呼寄たり。怪をあらせ
願ふ面々能相親く。某の服眩耳目とあせと論せれり。
蜀乃先主諸葛孔明と情好む。密をあらせと。關羽張飛
懐え。以時先主の或某の孔明あるを。魚乃水了有ら。如
志願の諸君復言あせと。有ら。關羽張飛後有ら。如
晴信朝臣佐久小縣乃都を討て。村上了。逼らんと。何と
為ら。勝へる。我と。向せ。け。は。晴幸さん。候。小縣郡海野
庄と。上野國吾妻郡三原庄と。壙連と。推科更科乃。西
郡小隣里村上乃葛尾と。無礙不程。近。海野地頭小左衛
幸氏乃後。小真田。彈正少弼。幸隆。近年村上。了。西庄を。掠ら
也。今。浪人。ふ。上野。叢輪の。長野。信濃。守業。改。ら。許。ふ。以

又晴此者を召く。西庄安堵を賜ふ。里以。自。然。小。西。科。を
狭め。村上を。斃。せ。便。と。成。る。く。以。あ。つ。と。中。を。は。晴。信。朝。臣
實。も。然。る。處。と。即。真。田。を。召。せ。く。里。真。田。此。歳。必。一
弓。箭。を。家。乃。藝。を。叢。兵。法。を。晴。幸。乃。指。南。を。受。り。故。と。か。や
爰。小。佐。久。郡。小。回。井。と。云。處。了。小。回。井。又。六。郎。同。次。郎。左。衛
門。尉。と。く。兄。弟。乃。者。あ。り。村。上。一。味。と。く。海。野。三。原。乃。通
路。を。絶。り。真。田。を。海。野。へ。歸。せん。ふ。を。此。路。を。開。く。以。て。は
叶。す。去。及。小。回。井。を。詔。へ。と。く。使。者。を。遣。し。道。を。假。ん。と
言。せ。と。也。小。回。井。兄。弟。打。寄。武。田。を。信。お。す。大。將。お。り。佐。久
郡。を。打。越。く。海。野。三。原。を。討。程。あ。ら。は。其。往。還。了。遂。に。當。家
を。討。ん。と。ら。ん。唇。川。と。く。齒。を。む。し。と。云。と。あ。り。海。野。三。原。を

村よ乃葛尾不途迫し義清後援を為程ふらひ真田何れと
猛し共容易両店を取て叶まし晴信真田を見續んと打
出ふ時我等爰ふく啗留か及真田を討捕んとて掌内か
不慮しと評定して道を假しと返辭をか以晴信朝長是
を閉然し小田井を攻落し仇久小縣乃通路を開くへしと
天文十三年霜月中旬晴信朝長八千餘騎を引率し仇久
郡へ打し出晴幸か孤く蘆田下野守り村よ小笠原と睦し
からぬ申を知り色に竊ふ色を語ひけふし一議ふ由及
を以降冬と蘆田の小田井乃色を聞し小諸望月平原
依路前山内山岩尾等の城皆所縁し終り降里けり去
共小田井を只一人肝去く四方敵を引請く今や壽る

と待懸大里去程ふ十二月十四日板垣駿河守信形先鋒
ふく押寄時乃聲を揚く責掛せし小田井又六郎も切く出
火花を散ちて攻戦板垣り組小廣瀬郷左衛門猪子才兵
三科傳右衛門曲淵少左衛門鍵を合せ思々了高名をふ
田井叶を以城へ引入大里明也の十六日乃早旦ふ武田孫
六信連を大将とすく。己夜源左衛門尉昌豊原隼人佐昌勝
ふ久子餘騎を差副板垣り加勢とす一時責り攻破り曲
淵又六郎を突伏く首を取り小幡孫次郎又六郎も弟
次郎左衛門尉と小田井も家子上原市之助と二人も首茂
捕文將討せし上へ小田井愈落城を斯く仇久郡一圓り平
垣志川也は内山城り飯富兵部少輔虎昌を置小諸城不

小山田備中守信茂を置岩尾城、真田彈正少弼幸隆を
籠置、村上勢を押さず晴信朝長を甲府へ凱陣あり、是
晴幸より肺肝より出く初度乃勝利と聞えり、晴幸より真
へ歸さるるを謀り、秦乃未了、吳楚、燕、趙、齊、魏、皆其の
先代以後を去り、玉とあせし、故智不依る、おふへ、
諏訪郡を討ち、を、晴幸の意見を問ひ、晴幸中 扱
諏訪刑部大輔頼茂を正しく、君乃叔母婿不坐せと、
大殿信虎と堀目を争ち、勢らさく、近頃、矛楯、子渡ら勢を
ふ、元來指る遺恨あふ、非、合戦志く、士卒を苦く、百姓
を傷むる、良將の徳と云へ、是ハ和平を取結、
隣國乃好を篤く致さ、おは、伊奈郡ま、御手不屬、
と、と、理明ら不計、里け、は、即、葛木を限、甲斐と諏訪と

乃堀を正し、長く一家乃交を結、んと、契約乃使者を遣
去、不頼茂、晴信朝長の軍法、敵ハ難く思ひ、け、時、お、
よ、け、と、悦み、天文十三年、極、月、和平乃儀、整ふ、頼茂
甲府へ冬向あり、晴信朝長、響應乃為、と、大、益、大、丈、了、能
藝を興、勢、さ、勢、さ、け、里、爰、不、板、垣、駿、河、守、信、形、を、
龍、馬、助、信、繁、と、共、り、去、二、月、十、日、諏、訪、へ、發、向、し、對、陣、を、取、
り、居、た、
里、け、お、る、思、ひ、寄、り、晴、幸、ら、計、畧、ふ、と、忽、和、議、調、ひ、
兩、陣、無、事、不、屬、せ、し、か、信、形、偏、執、乃、情、を、起、し、勇、士、霜、露、不、
起、臥、去、
く、死、力、を、竭、せ、し、勲、勞、を、辨、士、之、寸、乃、舌、了、奪、を、
色、け、お、去、
安、く、孫、如、何、お、し、と、晴、幸、不、一、鹽、川、け、
と、思、ひ、中、間、頭、萩、原、弥、右、衛、門、尉、を、
誦、入、て、頼、茂、ら、能、不、聞、と、
也、餘、念、お、け、り、見

一處を飛掛り只一刀不切伏夫里頼茂も服指を抜萩
原を突通さんと為つてと小遂子叶を以討せりけり
廣を攻ける時、齋食其齋王不説く齋乃七十餘城を下
韓信乃乃齋生了歸するを嫉く夜齋を襲ふ齋王齋生を
烹く刺入起ると、史記不見え大里今板垣の晴幸、是に於
て誣訪重代乃侍と小大不憤里誣訪乃祝を大将とく
甲府へ寄ると謀由問ふけさる去り押寄踏潰すと天文
十年正月十九日遂に誣訪を打滅し板垣信成を城代
と以二本壽齋記一天文十四年正月頼茂然るる頼茂不
甲府へ頼里板垣入る生害と見ゆ
一人乃娘あり今年十四歳あり容顔乃嚴々譬を取
物あり母御前を晴信朝長乃叔母おさる諸共甲府へ
來り幽おろ方了住せ玉ひくふる晴信朝長風小娘君乃王

王續一ノ四十六

を聞玉以側了呂置をやと思ふを老長等了議せられ
けある板垣、飯富、甘利を始一同了頼茂主を討玉ひ一と
君乃本意不非とと云共誣訪乃一跡断絶せしハ女姓あり
小怨ありと思ふを急し御側了呂置せの如何ある野心を換
せ玉ん小知難し御用公有る弦るへ一と中けある晴幸、竊ふ
中、板老長等乃中、案其理問えくハハと小娘君後不君を離
と思さ玉ん小ハ今臆々と當方へ渡らせ玉んや、誣訪あり
如何小ハ成玉人へ一然ハ何乃御氣遣りハハと結向娘君乃
御腹了若君誕生坐ハ若や誣訪家乃立還ふ悦ハハと
今降参乃誣訪借代乃侍共乃心を固むる便ハハと
議らへハ何ハ成玉一決一然去替娘君を呂置乃也
頼茂乃女孝也



芳を撃く中世
 芳曰く何故不反や
 女云く蠻賊を畜ひ
 父を誅せ父讐ふ人
 を同せ以て人乃父母
 を逆害し復無礼を以て
 人を凌ぐ吾死せざる所以ハ
 汝を誅さんと欲せれハあは恨ハ
 汝の首を通衢小鼻くく以て大
 恥を塞とを得ざる乃て遂に自
 殺せと見也



華陽國志
 不王廣劉
 其不使く
 西楊別刺史
 正不不蠻極
 芳攻く揚別
 を陷いる廣
 殺る女年十
 五芳去を納
 閨室乃中ふ於く

玉續一ノ四十七

信光
 燈ハ
 高小寺
 乃
 舊物
 後人

く義ふ！晴幸其よく為と無を知り明部と云へ！然れ
と小本曾將軍義仲の甥頼家卿の妾大里一町新編纂
圖り見ゆ。正しく父乃成乃ふふ里。同年六月十三日夜刻
晴信朝長甲府を首途ありて十六日佐久郡小諸城小着
ふふ是れ晴幸の勸ふ依り去年降参乃蘆田相木望月前
ふ等小村止押乃計畧を示せせらせんう為とかや然るふ
木曾小笠原両旗みく潮尻嶺を打越諏訪郡へ攻寄る由
板垣信成乃飛脚十九日午刻ふ小諸に到着去へ諏訪
ふ向へやと云ふふ甘利備前守諸角豊後守昌清京加賀
守昌俊ふ先陣打を次ふ晴信朝長右了栗原元兵衛尉詮
冬元ふ伊豆守信良元ふ小田元兵衛尉信明武田元馬
助信繁後陣を日向小宮ふ勝沼今井長坂逸見南部の人

玉續一ノ四八

人かま

宋史兵志ふ熙寧中帝神宗皇帝時本後三条院白輔臣
と管陣乃法を論しと云ふ八軍六軍皆大將を中し居大
將を譬へ則心かま諸軍を四體かま其心智を運し身
を以て臂を使ひ臂を以て指を使ふ尤を攻むに右救ひ
右を攻むは左救ふ前後も亦然ると云ふ依り晴幸以
前後左右乃四陣列を化ししと知ふ晋書天文志所
と云ふ天子の三將軍を主と中央大星を大將軍と云ふ武
左星を左將軍と右星を右將軍と以て関架を備ふ難
を距り且險を設守り謀徴を知らん
かまなと有るを思ひあてせり知へり
小笠原長時潮尻峠を打越甘利の勢ふ突掛里一柵操り
攻戦ふ戦ひ既ふ聞ふ不時諸角昌清横合より突崩さんと

競ひ掛る去共長時乃將長澤兵衛大丈能戦ふ甘利諸
角急小破走んと以るを見く原加賀守昌俊軍を今も續や
物共と敵を引手了引受横鐘を突掛る長澤今日を限と
力戦し小笠原乃軍潮乃如く盛返さへ甘利諸角原之
手乃兵士命を際りてを挫くと云共敵乃兵機壯ふし味
方漸敗軍ふ及さんと以時ふ右備乃栗原九兵衛尉詮冬宛
小伊豆守信良ふ小副了押出一潮尻嶺小向く木曾勢
ふ突く掛り小笠原乃後を絶んと馳け色は左備乃典厩
小山田小雁了續いし攻掛る長時色を見く敵を後
陣小押廻る勢引包さ色く木叶入り山領了引くよよ里
攻よと云獲出勢あ色大旗小旗色めり渡ををまを敵

を崩す追討去く分捕せよと聲掛り晴信朝臣乃旗本を
鶴翼子関りし長時を追捕翁んと攻兼色は長時遂に敗北
以手刻より里朱刻より乃軍小味方へ打捕首六百廿九級
と勢是偃刃乃陣法お里と云里
五代史小安重榮及ま杜重威逆く宗城了戦ふ重榮偃
刃陣を為重威出也を撃ふ動り以少く却り以く是を
伺えんと欲す時小偏将王重胤り云西兵相交と云退者
先敗るお里と以分て云と云小重威先左右隊を以く其
両翼を撃く戦酣ふ孰時重胤精兵を以く其中軍を撃
重榮遂に大に敗る云里左備右備を以く後援乃木
曾を撃後入旗本を以く長時乃本陣を破り了と符を

合を失ふる如し

伊奈乃一毅を小笠原本曾乃敗走を餘り見たり
静里返る備ふ申乃下刻不及んと悉く陣を拂ひ一人も
残らざる引退く此子に向ひ板垣信成を見敵を引
退く追蒐く咬留よと競里切く押出以信成を甥小萩原
與三九衛門尉同九郎次郎とて兄弟乃者有ける信成も
馬乃側子馬打寄伊奈勢乃引取様心得難く候能く御思
案有へき小やと云信成大に怒る若老し似合ぬ怯弱ある
詞のか軍を斯出そ驅せ續や者共と真先小進む折節日
まゝ暮ると志く霧立掩ひ小雨降出前後乃物色見
る分ぬ處を討たりと相圖乃大鼓を打く伊奈乃一毅引返

玉續一ノ五十一

せの隈より伏置たりけり遅兵處々より起り板垣を中
小取圍関を作里と據合たり萩原兄弟能軍と九郎次
郎を始良者曰十一騎枕を並へ討死を信成幸く志く
士卒を纏り引揚たせと敵をば三騎小十一人討死味方
も百又十三人討死を信成一身不覺と皆人足を詳しけ
る小晴信朝長と怒り入ると小静小晴幸小是非乃
意見を問ふ小晴幸畏く申けるを尤右乃備ふ本曾を
追々取々小引捕り中軍より長時を破る板垣遊軍も
終日伊奈元と對陣志く箭一ひを小射遠入あつ及た
既小伊奈衆乃退くを見く老練乃信成逸里過く捨奸小
遇く破也いと聲の節乃猿も本より落ると及爰もく以

然也共信叛亦也及出萬死を出て一生を遭たんが終末
練乃者多く以て一人由生くを歸るまゝを也然らば
も君乃御徳みくひとやみま皇晴信朝長結句快了空く板
垣ら敗軍成更了終めあふと無里乃皇 秦獲公百里孟明
視西公孫百二西
之人殺ふ敗軍普了獲也後ふ秦了歸里 一とを獲公素服
去る郊に迎ふ青を攻く大徳を掩て以て云く三人を對
敵事思ひ合へり 天文十五年二月下旬晴信朝長小縣郡
戸石城を攻むる為出陣乃用意あり伊奈小笠原乃押上
板乃押甲府乃留守等も人數を訂むり也及戸石へ向ふ
軍兵は二百七十餘人と控閑え大皇三月十四日城乃
巖へ押寄く粟原左兵衛尉詮空蒼蓋回下野守相木市兵衛
川上入道依知福澤平澤等を先鋒ふあし只一搦み攻落

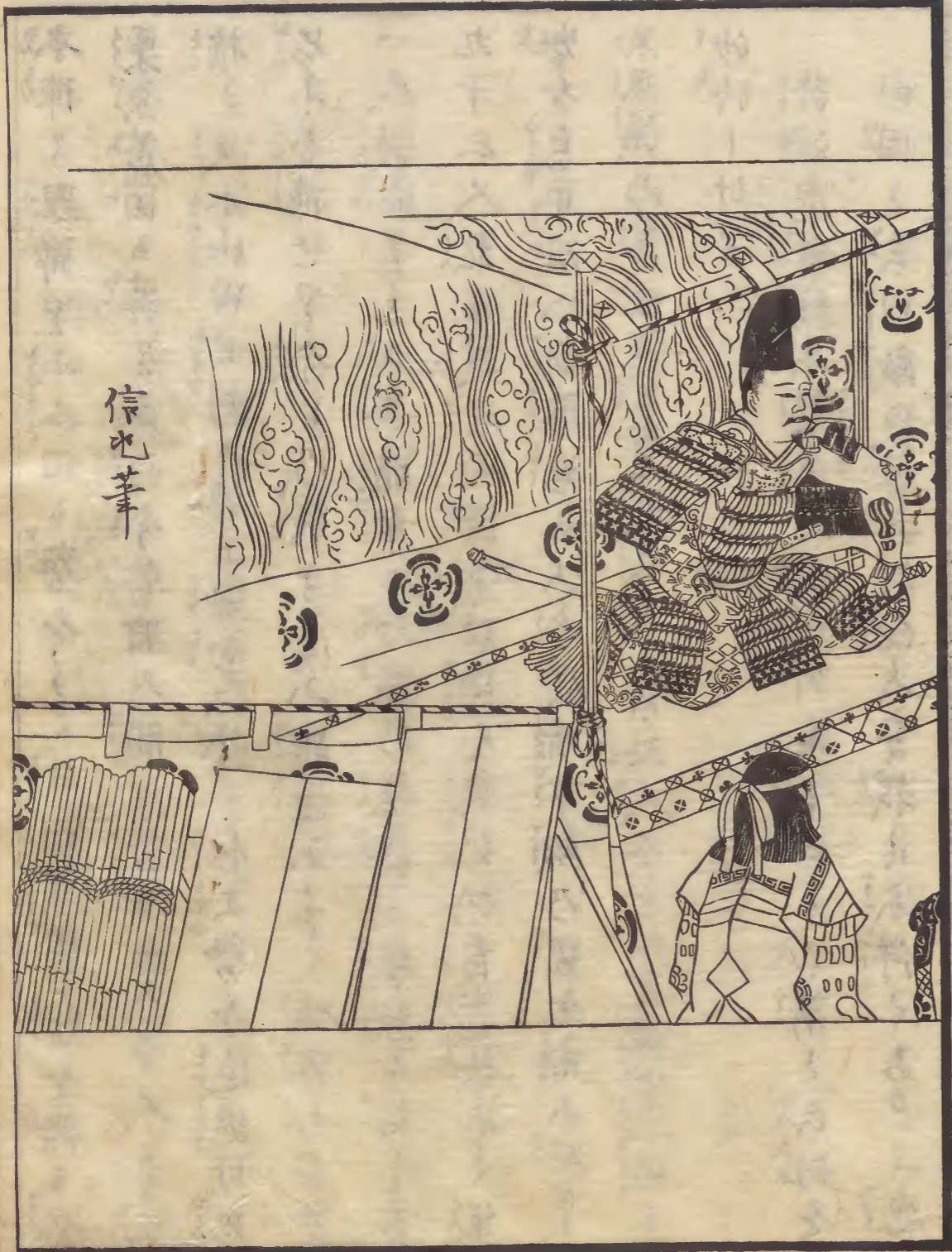
玉續一ノ五十一

さんと搦大皇又村上義清乃後援了向へるを甘利備
前守横田備中守同庚十郎が後駿河守之戸田御乃而方
まふ茨根殿乃藪を前ふ當く陣を取其次了小山田備中
守其次了晴信朝長曾根七郎兵衛山本勘助安間と右衛
門を從へる旗を立玉ふ後備を諸角豊後守昌清かり葛
尾乃城あふくも戸石乃往進を同や各村止義清七千六百
人を引率まゝ樂宗寺右馬助小島五郎左衛門了先陣打
世甘利了手へ面中振せ切る掛名小島關入家勇士あふ
諸卒も進く働くを横田庚十郎耽と見く又晴敵や好む
處乃相手哉と馬を馳寄押雙組を落く首を討來牌共子
公捕ま樂宗寺を頼切大家小島を討せ安ゆりん忠ひをん

一戦了雄を决せん之真幕小突掛里火花を散志之攻
戦へは城中より小関を揚城戸を開く打く出栗原蘆田
勢小面小振と突掛は後陣了如多川上入道見崩也
小崩也之相本福澤了備了逃入大里栗原蘆田よく戦ふと
云と小村上勢と大軍か也へ入替々命を惜ま以攻蒐る甘
利備前守横田備中守一之小引を二處ふ之討死を晴信
朝長小今之是之々小山田諸角を左右了云義清と有之
乃一戦を遂んと逸ら也けかを晴幸は率尔乃御名別
か里良将之危戦を挑ま以敵乃胴勢を南了向をせ以り
必定味方乃勝と成魚了之中を以晴信朝長味方乃軍兵
さへ自由了からぬ了敵乃勢を以何とく先様ふの爲へさ

五後一ノ五十三

楚と宣への晴幸然らの諸角了五十騎を暫く御預下され
以へか一術仕る見以とんとせ此よを鬼小角小軍の晴
幸小任とふか里と之諸角を以勤助了引合せ組子を暫
晴幸小渡以へと宣以け也の諸角畏る組子を晴幸了渡以
晴幸我是輕少人との諸角了組子五十騎とを以以下澤
を押し廻し戸石乃邑乃後へ押出し備を立大里村上勢を
甘利横田の備を突崩し晴信朝長乃旗本へ真一文字了
切懸らんと捫合けるら小本諸角了備乃立様是を必定村
上勢乃跡を取切んと為か方也去は先け勢をや追拂
へさ之胴勢を去し南小向よと見えけ也へ甘利了組乃米倉
丹後了軍を勝之と聲かけり真先了進む晴幸鞭を拳了



信也筆



晴幸敵を南へ向ん
計畧を議せ

五續一ノ五十三

本陣了馳歸里小山田の勢をくく甘利横田の跡を誅る又
栗原蘆田の陣了走仍今暫時乃間之努力玉へや人々と云
揃く又小山田甘利の陣了馳向ひ終了村上勢を追退け思
ひふ分捕せし今日乃戦まると小難儀ふし味方七百廿
一人討死と云共晴幸り一時乃推謀る依敵を討て百
九十二人然も芝居を踏く膝関を執りひ首實檢去く軍
勢を息甲府へ凱陣為玉今度晴幸敵乃勢を漸小廻せ
不思議乃軍配よ生魔利支天との此人あらんと國中一同了
沙汰しけり

許洞虎鈴經小叢虚乃術二のあり因と云誘と云何を
か因と云日敵の盛兵乃向人我由亦伴く亦也不應

去別子精兵を以く潜小虚地了出く或も其壘を攻ん
と一或も其後を断んと一或も其積聚を焚んとすを云
公本村上乃後を断んとせし何を誘と云敵の要
地を欲する時を則せめと一隣を攻其攻具を大
か一其師旅を盛ふ一以く敵兵を誘一敵兵到と云ハ
則とゆ了戦人トかく壁小復く守里潜了精銳を以く
兵乃城もか所を襲く其内を掩人を云とあり今晴幸
り廻すと云ハ出乃因の義と聞えり

同年七月廿一日晴幸り軍功を賞せらる六百貫を加え
是輕又十人を増預けら數前小合せり八百貫了七十人
人乃定輕大将あり但此時知り小改免らる一とや
今
二千

二百石許晴幸甲府了来。己年乃内了真田を截り、伏久
諏訪両郡を鎮め、小田井蓋田内山岩尾等之城々を取潮
尾戸石乃合戦了功を顯せし。今斯大身と云ふて、良將の
能人を用人と思縁との云か。九年寄食せし庵原小悦
を告たし。晴幸少時乃暇を乞ふ。駿府了至り。乃是は
庵原安房守晴幸を留る。種々乃饗應山海乃善美を盡し
且晴信朝長年猶弱し。廿六と云共智勇乃各將了坐中を
傳聞る。庵原小悦は志を甲府了通ちける。と。晴幸庵
原了語る様。己年以前某甲府へ發足。乃前百貫の朱印を
取。後了罷越り。へと意見を副らせ。何るを承引せ。りし
奉意。我等片目。お。破。お。然。小。勢。界。く。色。黒。し。百。貫。乃

河領過分。か。り。と。誰。も。誰。も。思。小。屋。し。晴。信。朝。長。も。万。一。九。思。さ
せ。たら。ん。つ。の。河。領。を。出。さ。る。お。物。ら。の。我。等。他。國。し。く。朱。印
を。人。了。見。せ。晴。信。朝。長。を。虚。云。を。仰。ら。る。と。云。ん。の。必。定。ん。と
て。并。殺。あ。の。屋。し。と。存。し。く。朱。印。を。取。り。去。る。ひ。し。り。見。冬。の
初。め。二。百。貫。さ。り。今。八。百。貫。乃。知。り。成。以。て。晴。信。朝。長。の。目
利。多。く。人。乃。推。挙。し。依。中。し。以。實。小。肝。乃。價。ふ。り。と。終。夜。抱
語。り。日。滞。留。あ。り。舊。交。乃。奴。を。報。ひ。し。と。か。り。と。蘇。秦。六。國。の。王
去。後。合。り。後。蘇。秦。後。約。乃。長。と。か。り。并。て。六。國。の。相。と。あ。る
と。史。記。み。見。え。く。り。晴。幸。朱。印。を。取。り。去。り。終。見。冬。の。後。録
を。受。し。と。辨。士。乃。胸。し。十月。六。日。晴。信。朝。長。笛。吹。嶺。乃。合。戦。了
并。勝。己。子。二。百。六。人。討。捕。亥。刻。小。首。帳。認。め。終。り。勝。關。を。執
仍。ち。せ。け。か。時。晴。幸。ハ。貝。乃。役。小。幡。虎。盛。ハ。太。鼓。役。飯。富。虎

昌々太刀持板垣信成を團扇乃後原虎胤を合歡木乃子
真羽箭加夜駿河守の旗乃後金丸筑前守虎義の朝天子乃
平水飯富源に即昌景々太布乃手拭かきといや同十六
年二月二日晴信朝長晴幸を召く國中乃法度又十六條
を定めら後甲陽五十五條六月と有る同月十五日八
幡宮今益部八幡と云武田信繩朝長糸詣あり廻廊小
於孫子乃五事一、道二、天三、地周書乃七割一、二
不攻之小鬪に小伐又一、二以下深々乃問答了及々色々里
斯く去年戸石ふく志を得さ里一か八月二日小縣郡小
進發ありく上田原小陣を取先陣々板垣信成之千八百
餘騎奇心乃六部了備きた里二陣々飯富兵部少輔虎昌

玉續一ノ五十六

之百騎小山田備中守七十騎同左兵衛尉二百騎典厩二
百騎晴里夫兵七百七十騎を以部小豊ん々備ふ也は
後陣了馬場民部少輔内後修理亮逞兵之百七十餘騎旗
本を護りく和之夫里又旗本より五六町引下り里原外負
守昌後之百餘騎小々態と用く陣を取あ也晴幸々指南
ふく締り陣と勢舞大里村上義清去也を以精兵を騰く
二百餘騎是輕二百八十人小鐘弓鐵炮を持也馬廻り三
卯花威乃鎧了諏諏法性乃兜黒馬子金覆輪乃鞍是去也
望む晴信去也只一打小と切掛り也の窪田助之進走里来
く義清り乗く馬乃平頭を突貫く突也く馬を屏風を
倒さぬ顛也の義清去逆子百と落あややと見物る也

村と勢十口又騎逐合之中小包引退く角と見分より
服備乃真田諸角一人由漏さくと追蒐去る義清葛尾へ
入まと能を以猿馬場乃麓葉原へ打と出古市を渡り
深山より分入里峰久攀谷子下と越後國へ越落大里け分
此日板垣討死し晴信朝長薄く二箇所負せゆと備上
け色ハ旗率と出く由亂るる五分一戸石城由落葛尾城由
開城し埴科更科乃西郡全く甲列乃法令を仰き高坂井
上綿内須田高梨仁科乃瀬場以下皆降参志く信幻先方
乃備了列を返くふと去と併去と晴幸の肺肝より出く
真田を海野母歸せし策乃成就せし處分ふや
五歳甲府不末此年十月九日越後乃長尾景虎六千餘人
更く五年めり

玉續一ノ五十七

を引率し春日公を首途し信濃國入打く出海野平ふ
陣を取景虎生年十八歳あは村と義清を葛尾了歸し
山より為とかや伏久小縣西科乃城至と由注進揃乃齒
を引如くふりし晴信朝長同十二日申刻し甲府を進發
有る十六日ふ小諸子馳着軍ハ十九日と定めらる晴幸と
小幡虎盤原虎胤二人を物見了出させたり暫時志く馳
歸り晴幸を敵乃備整中乃散と云ふ合戦を持し持と
と云里原小幡を人数六子乃内外合戦を持し備縮と
く見えゆと中々里
吳子料敵篇小秦陣ハ散志く自闘楚陣ハ整ふ志く久
から以秦人の性強ふ志く其地險其政嚴其賞罰信其入

譲らざる皆闘心あり故に散しし自戦人其性弱其
地廣其政騷其民疲故に整く久しからんと見ゆ越後
國廣く人氣柔弱あふ上り時既り十月あり小荷駈乃
路雪深からんと以春日山より里海野平に至る廿七八里
國を隔境を踰る二日路り及入只景虎乃家法嚴重
先く老将勇士其指揮不後入を以て爰に至ると云
軍を義清を主と以故に越後乃兵闘心却り鮮く是を
以て整中乃散と料里軍を持り持せと評せしあり
晴信朝長より備を配へしとく晴幸と商議し鶴翼乃陣
を張て鶴翼乃大に維時西土より傳ありと云八陣法の
一あり但陣法了虎翼鶴翼の各あり共鶴翼乃
軍午刻と定めら敷是を景虎乃陣の未乃方を背し

玉續一ノ五十八

く丑乃方了沖ひ晴信朝長を丑乃方を後にあしし未の方
に衝ふ十月午時子至く丑乃孤ふし破軍乃柄了雷
未を虚ふしし劍鋒ふ當也バかり
是晴幸孤虚ふ通ふ山
田備中守真先不進く長尾正景乃手不掛向ひ鐵炮を打
違ふふや盾鏑を令せ暫戦く正景打負引退く次り直江
山城守村崎和泉守安田上総介進く小山田右兵衛尉乃
手不突掛里面より振む攻戦人直江村崎安田少勝ふ乘よ
と見し小栗原左兵衛尉敵を横子引合く急乃太鼓を打
鳴し甘糟迎ひ守り備ふ駈向へし越後勢を去し白けし見ゆ
る時景虎宇佐美良勝と只二騎馳來青竹乃杖を打振手
輕く人數を引揚ら敷晴幸去也を見し晴信朝長了申換

景虎人數を纏め引捕あくと見えぬ味方乃勝不
衆と追蒐いん時大返く返く合さ無二乃一戦を為ん
と乃術あふへ速り了軍を引揚長追あさる様了御下知
有とやと云の實もとく百是乃指物了たあ使番もく小
回栗原乃人數を收め軍乃次第を亂せ也け了敵を討
と二百六十二人味方乃負討死百二十一人と聞え
け里是晴信朝長と景虎と弓箭を握り相争ふ初あ里晴
幸能其兵機を察し其隊伍を堅し其陣列を整ふ不り故
了守佐美直江村崎等乃宿將ま甲軍乃侮りて張知
く速り軍を纏め是を還せ彼も是も智あ里勇あ里孫
子子彼を知己を知の百戦終から以彼を知と由己を知

三續一ノ五十九

ハ一勝一負彼を知己を知さとの戦と了必敗ると云
理虚一やぬをや

甲斐乃總軍ハ一萬五千人小山田備中守相木望月蘆田
友野平尾岩尾耳取依智平原二千五百人を七組に組て
一乃先手と一小山田元兵衛尉長蘆小曾塩屋村田福澤
内村二子百人を七組に分く二乃先手小三栗原元衛門
依昌清嫡子元兵衛尉詮冬須田室賀綿打井上千五百
人を三組に組あし中乃先手と一真田彈正少弼幸隆
九子屋澤本旗本と合く千八百人の組了分り列を立
又飯富兵部少輔虎昌千八百人を三平本合旗本乃右
服了備ふ也は馬場民部少輔景政同く千八百人あ

左脇に備ふべく内後修理亮昌豊日向大和守昌時勝
入道虎山伊豆守信良武田典厩信繁二子に百人を
八組に組み後備遊兵と名し原外賀守昌後を九十騎
を引合ひて跡備ふ並に緋の備を立小荷駄千人二手不
合ひ跡先を押し大里是晴幸を數年訓練せし教冊七
組一万八千の備立大里景虎を六千の人数を龍乃丸
備ふと大旗本を以て一軍を持んとしと云ふ是れ
備と大黃帝問元女兵法を敵に圓陣を為し已直陣を
以て是を攻る云々圓陣の土陣を里と云ふ黃石公記
に鏡來色の曲是不應し曲來色の圓是了應と云ふ圓
陣のよきと云ふ

